

施設被収容少年の文章完成法テスト における反応傾向について

——特に家族領域に関する刺激文に対して——

酒井 敏夫

はじめに

当研究所の研究テーマとして「非行発生基盤となる家族の特性に関する研究」をとりあげ、そのアプローチとして、非行少年（少年鑑別所ならびに少年院に収容されている収容少年）と比較群として一般少年（中学生・高校生）に対して質問紙による調査、家族画および文章完成法テスト等の心理検査を用いて、施設に収容されている非行少年の

- 1 家族構成と家庭内問題との関係
- 2 家族成員相互の人間関係の特性
- 3 家族成員相互の認知構造の特性
- 4 家族間に共有する価値観の特性

を明らかにしようとした。

本研究は、そのなかで文章完成法テストからみた家族関係をみようとするものであるが、文章完成法テストの性格上、対象少年の家族および家庭に対する認知構造をとりあげることになる。

しかし、文章完成法テストで反応され、記述された事象が、面接その他の調査で確認されていないので、その記述された内容や事象がそのまま家族および家庭内の客観的事実であるとは言いきれないし、またすべての反応が対象者の心理的投影とも言いきれない。

いうなれば反応文がかならずしも、客観的事実をそのまま反映しているとは限らないし、裏付け調査を欠いた文章完成法テストで言えることは、どのような反応文が書かれてあったかという事実だけであるともいえるが、それらの反応文の中には、被験者のさまざまな

特性がプロジェクトされる側面もかなりあるので、その反応文の形態から対象者の特質を推測することは、文章完成法テストの解釈上重要な役割をもっている。

そこで、本来文章完成法テストはケーススタデーとして用いられるべきであるが、対象群の特性を明らかにし、反応形態のもつ意味を調査するために、今回のような刺激文に対する反応文を分類して統計的処理をしてみた。

目的

施設に収容されている非行少年を非行進度（施設の種類から推定）から少年鑑別所群と少年院群の2群に分け、それぞれの群の文章完成法テスト（以下SCTという）の反応文と、比較群として一般少年（中学生・高校生）のSCTの反応文を比較して、対象者の家族領域に関する刺激文に対する反応傾向と、さらに家族領域についての認知構造を明らかにしようとする。

方法

対象者

少年鑑別所	11施設			
	男子	508名	女子	88名
			計	596名
少年院	19施設			
	男子	493名	女子	307名
			計	800名
一般群				計
	中学校	男子	105名	女子
				76名
	高等学校	男子	45名	女子
				102名
調査時期	1989年（平成元年）10月1日			
	～11月末日			

手続 き 今回使用した文章完成法テストは法務省式文章完成法テストを参考にして財団法人矯正協会が作成したもので、刺激文は23項目から成り立っているが、そのうち家族領域に関する次の7項目の刺激文を調査対象とした。

- 1 お父さんは
- 2 お母さんは
- 3 私のきょうだい
- 4 私の家は

- 5 家にいると
- 6 家の中で私は
- 7 家がいやになるのは

上記、刺激文に対する反応文を、それぞれ刺激文に応じて、実際の反応文をもとにカテゴリーを設けて分類した。

なお、一部法務省式文章完成法解釈手引による分類基準を準用した。

各刺激文に対する反応の分類と分類基準は次の一覧表のとおりである。

刺激文 1 お父さんは 2 お母さんは

分類項目	基準 および 例示
親和・肯定	父親（母親）を感情的に受容しているか、または自分が親から受容されている内容を示す。 （例）父（母）は好き。尊敬している。偉大。優しい。よい人。 私を心配してくれる。かわいそう。毎日が大変だ（配慮）
拒否・否定	父親（母親）を感情的に拒否または否定していることを示す。 または親から自分が拒否されている内容を示す。 （例）父（母）は嫌い。うるさい。こわい。おこるとこわい。 私と話をしません。いい加減な人。
敵格	単に「敵しい」と反応したもの。
行動・性質（+）	父親（母親）の行動・性質が社会一般の基準からみてプラスと思われる内容。 （例）真面目な人。働き者。明るい。おとなしい。
行動・性質（-）	父親（母親）の行動・性質が社会一般の基準からみてマイナスと思われる内容。 （例）大酒飲み。刑務所に入っている。短気。頑固者。
両価	父親（母親）に対する好嫌及び肯定と否定が同時に表現されている内容。 （例）優しいが怒ると怖い。こわいけど好き。
離別	父（母）となんらかの形で離別している内容。 （例）〇〇才のとき死んだ。父（母）と離婚した。蒸発した。いない。
その他	上記以外の反応。 （例）会社員です。病気です。男（女）です。無口な人。

刺激文 3 私のきょうだい

分類項目	基準 および 例示
親和・肯定	きょうだいを感情的に受容しているか、または本人がきょうだいから受容されている内容。 (例) 可愛い。大好き。やさしい。仲がよい。私を大事にしてくれる。楽しい。相談しやすい。
拒否・否定	きょうだいを感情的に拒否あるいは否定しているか、または本人がきょうだいから否定されている内容。 (例) 嫌い。仲が悪い。よく喧嘩する。他人のようなもの。あまりしゃべらない。生意気。冷たい。
行動・性質 (+)	きょうだいの行動、性質が社会一般の基準からみてプラスと思われる内容。 (例) 頭がよい。明るい。勉強ができる。まじめ。
行動・性質 (-)	きょうだいの行動、性質が社会一般の基準からみてマイナスと思われる内容。 (例) 友達からこわがられている。よく捕まる。不良少年。
一人っ子	「いない」と述べたもので一人っ子が推定できるもの。 (例) いないから欲しい。いない。
その他	上記以外の反応。 (例) 4人。姉(兄、弟、妹)。小さい。

刺激文 4 私の家は

分類項目	基準 および 例示
心理的肯定	心理的に自分の家庭を是認し、受容しているもの。 (例) 明るい。幸福です。いい家庭です。まとまりがある。平和だ。うまくいっている。
心理的否定	心理的に自分の家庭を拒否または否定しているもの。 (例) てんでんばらばらです。不幸だ。暗い。複雑。おもしろくない。うるさい。けんかが多い。冷めきった淋しい家。
物理的肯定	家庭の物理的な条件を肯定的に述べているもの。 (例) 裕福。とてもきれいな家です。大きい家。
物理的否定	家庭の物理的な条件を否定的に述べたもの。 (例) 貧乏だ。狭くて小さい。ボロボロの家。狭くて自分の部屋がない。交通の不便な所にある。
その他	上記以外の反応。 (例) 4人家族。アパート。一軒家。団地。普通の家。中流家庭

刺激文 5 家にいると

分類項目	基準 および 例示
肯定	家にいると情緒的に安定しているか、肯定的な感情を示す内容。 (例) 安心できる。落ち着く。明るく楽しい。解放感がある。
否定	家にいると情緒的に不安定になるか、否定的な感情を示す内容。 (例) 邪魔者扱いされる。おもしろくない。いらいらする。疲れる。うるさい。落ち着かない。
無意欲	「退屈」とか「ひま」といった意欲をとまなわない内容。 (例) 退屈。ひま。もったいない気がする。
非活動	「ねむる」「寝る」「ゴロゴロする」などの活動的行動のとまなわない内容。 (例) 寝る。ゴロゴロする。ボケーッとしている。なんにもしない。
交友	友達と交遊関係を持つ内容。 (例) 彼女と遊ぶ。友達から電話が来る。友達が遊びにくる。
その他	上記以外の反応。 (例) テレビを見る。読書する。掃除する。手伝う。

刺激文 6 家の中で私は

分類項目	基準 および 例示
肯定	家の中での自分を肯定的な自己概念を持っているか、家族から受容されている。または家族とのコミュニケーションが良好の内容。 (例) 明るい。楽しい。真面目。家族とよく話す。手伝いをする。可愛いがられている。大事にされている。
否定	家の中で情緒的に不安定、または否定的な自己概念を抱いているか、または家族から拒否、疎外されている内容。 (例) 問題児。嫌われている。暗い。閉じこもる。大悪党。信用されない。相手にされない。
自我主張	家の中で自分を強く主張し、顯示し、我侪を押しとおす内容。 (例) 我侪。大将。自分勝手。思ったとおりにする。一番えらい。
非活動	「寝る」「ゴロゴロしている」などの無為、無活動を内容とする。 (例) 寝てばかりいた。横になっている。ゴロゴロしている。
その他	上記以外の反応。 (例) 普通の子。テレビを見てる。長男です。ゲームをする。

刺激文 7 家がいやになるのは

分類項目	基準 および 例示
刺激文の否定	いやになることが「ない」という反応。 (例) 全くない。あまりない。
親の干渉	不満の原因を親の干渉とする内容。 (例) 親がうるさいから。勉強についてうるさいから。きびしいから。叱られるから。注意されるから。
喧嘩	不満の原因を自分と家族との喧嘩ならびに両親間の喧嘩について述べたもの。 (例) 父と喧嘩したから。両親が喧嘩するから。
不快	不満の原因が漠然としていて、ただ単に「おもしろくないとき」「思いどおりにならないから」「バラバラだから」「暗いから」といった内容の反応。
自己原因	不満の原因が自分にあるとする内容。 (例) 自分が悪いから。私の我仮。自分のせい。自分の気分で。私の自業自得。
外的条件	家族間の人間関係によるものでなく、外的な物的条件をのべた内容。 (例) 灯りがないとき。さわがしいから。友人の家から遠い。部屋がきたないとき。
その他	上記以外の反応(含む原因よりも結果をのべたもの)。 (例) 家出してしまう。友達といた方が楽しい。よくわからない。毎日ある。ひまだから。

結果

各刺激文に対する反応文の傾向は、以下の表のとおりである。(差の検定については、

対数線型モデルで分析し、5%水準で有意差のあったものである)

表1 刺激文 お父さんは

分類対象	親和	結果	拒否	結果	敵意	結果	行動性質(+)	結果	行動性質(-)	結果	両価	結果	離別	結果	その他	結果	計
一般群	102 (31.1)		30 (9.1)		8 (2.4)	+	59 (18.0)	+	15 (4.6)		19 (5.8)	-	12 (3.7)	-	83 (25.3)		328 (100)
鑑別所群	173 (29.0)		74 (12.4)		7 (1.2)		92 (15.4)	+	19 (3.2)		75 (12.6)	+	85 (14.3)	+	71 (11.9)	-	596 (100)
少年院群	238 (29.7)		144 (18.0)	+	10 (1.3)		63 (7.9)	-	62 (7.8)	+	77 (9.6)		125 (15.6)	+	81 (10.1)	-	800 (100)

+: その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある
-: その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

父親に対する親和の反応は各群とも(30%)前後あり、一番多く出現しているが、各群間に有意な差はみられない。

父親に対する敵意、不信、おそれ、または自分が疎外されている等の内容を含む拒否反

応と父親のマイナス面の行動、性質をのべた反応は、少年院群が他の群に比較して多く反応する傾向がある。

この反応傾向の裏返しとして、父親のプラス面の行動、性質の内容を示す反応は一般群

および鑑別所群が少年院群と比較して多く反応する傾向があると同時に少年院群は少なく反応する傾向がある。

対象者が父親をきびしいと記述した厳格反応は、親和とも拒否ともきめられないので、親の養育的態度としてカテゴリズしてみた。例数は少ないが、この反応では、一般群が他の二群と比較して多く反応する傾向がある。非行群に父親の教育的役割を欠くものが多いと思われる。

両価反応は一般群は少なく反応する傾向が

あり、非行群では鑑別所群が他の群に比較して多く反応する傾向があるが、一般に非行群には両価反応が多くみられ、非行群は父親との間に安定した人間関係をもてないものが多いと思われる。

離別反応は、非行2群に多く反応する傾向があり、一般群に比較して父親欠損が多いことが推定できる。

なお、各群間に有意差のない「親和」反応を更に下記のように細分類してみると表2のようになる。

表2 刺激文 お父さんは(細分類)

分類対象	優しい	結果	信頼偉大	結果	よい人	結果	好き	結果	被親和	結果	配慮	結果	計
一般群	44 (43.1)		33 (32.4)	+	8 (7.8)		6 (5.9)		9 (8.8)		2 (2.0)		102 (100)
鑑別所群	75 (43.1)		39 (22.4)		19 (10.4)		10 (5.8)		26 (14.9)		5 (2.9)		174 (100)
少年院群	91 (38.1)		38 (15.9)	-	20 (8.4)		30 (12.6)		54 (22.6)		6 (2.5)		239 (100)

+: その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

-: その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

父親を「信頼する」「偉大である」「尊敬する」といった反応は有意に一般群が多く反応する傾向があり、少年鑑別所群は少年院群と一般群との中間にある。

この反応の意味するところは一般群の父親が規範の体現者として、モデルの役割をもっているものが多いと考えられる。これに反して、少年院群にはそのようなモデル的役割を

担う父親が少ないと思われる。

以上まとめてみると、少年院群では他の群に比較して父親に対する敵意、不信が多く、さらに問題の父親の存在が多く、また父親の欠損も多い。さらに父親が社会規範の体現者としてのモデルを果たしていないものが多いと思われる。

表3 刺激文 お母さんは

分類対象	親和肯定	結果	拒否否定	結果	厳格	結果	行動性(+)	結果	行動性(-)	結果	両価	結果	離別	結果	その他	結果	計
一般群	129 (39.3)		40 (12.2)	+	3 (0.9)		55 (16.8)	+	11 (3.4)		24 (7.3)		2 (0.6)	-	64 (19.5)	+	328 (100)
鑑別所群	325 (54.5)		26 (4.4)	-	6 (1.0)		40 (6.7)	-	13 (2.2)		44 (7.4)		59 (9.9)	+	83 (13.9)		596 (100)
少年院群	407 (50.9)		99 (12.4)	+	4 (0.5)		57 (7.1)	-	17 (2.1)		61 (7.6)		70 (8.8)	+	85 (10.6)	-	800 (100)

+: その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

-: その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

母親に対する親和反応は各群とも最も多く、一般群（39.3%）、鑑別所群（54.5%）および少年院群（50.9%）で各群間での有意差はないが、傾向として非行群がこの反応を一般群より多く反応する傾向があるが、表4の親和反応の細分類でわかるように「優しい」という情緒的反応が非行群に多く、「信頼できる」「偉大な人」といった規範モデルとなる人格評価は一般群に多いことに特色がある。

母に対する親和反応は各群とも父に対する親和反応よりも多いが、これは母子関係の一体感から当然のことである。

母親に対する拒否反応は少年院群と一般群が多く反応する傾向があり、鑑別所群は少なく反応する傾向があるが、これは拒否反応を細分類してみると一般群では親の干渉を嫌う「うるさい」といった反応が他の群より多く

反応されているところに拒否反応を押しあげている原因がある。

少年院群では拒否反応の細分類では母を「嫌い」とする反応や母親を「自分勝手」「だらしない」「バカ」といった人格不信や、「自分に冷たい」「目の仇にする」といった疎外感や被拒否の内容とする反応が多くなっていることが特徴的である。

母親のプラス行動、性質を述べた記述は一般群に多いが、これも母親がよきモデルとしての機能を果たしていると思われるが、非行群はこの反応が一般群より少なく反応する傾向がある。

離別反応は鑑別所群ならびに少年院群が一般群より多く反応する傾向があり、母親の欠損が非行群に多いことを裏づけている。

表4 刺激文 お母さんは（細分類）

分類 対象	優しい	結果	信 頼 大	結果	よい人	結果	好 き	結果	被親和	結果	配 慮	結果	計
一般群	54 (41.9)	-	20 (15.5)	+	9 (7.0)		11 (8.5)		31 (24.0)		4 (3.1)		129 (100)
鑑別所群	213 (65.5)		12 (3.7)		12 (3.7)		22 (6.8)		60 (18.5)		6 (1.8)		325 (100)
少年院群	231 (56.8)		22 (5.4)		15 (3.7)		39 (9.6)		84 (20.6)		16 (3.9)		407 (100)

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

以上をまとめてみると、母親に対しては親和反応が各群とも多いが、非行群では母親を優しいとする情緒的反応が多い。これは施設収容にともない、面会などをとおして母親の優しさを感じる機会が多くなったことによると思われる。

また母親を社会規範のよきモデルとして認知することは一般群と比較して少ないと思われる。

少年院群では母親に対する拒否反応が一般群と同様に多いが、その内容は両群に質的な差異がある。少年院群は母親に対する不信、

嫌悪のほか母親から自分が疎外されているといった内容が多く、これに反して一般群は母親を「うるさい」と、干渉に対する嫌悪を示す反応が多い。次いで、母親の欠損状況も非行群に多く、父親との欠損状況を合わせて、非行群は一般群よりも家庭における不遇な環境が多いといえる。

性差は親和反応において鑑別所群で男子が女子より、この反応が有意に多いが、少年院群でも男子が女子より多く反応している。これは異性の親に対する甘えによるものと思われる。

表5 刺激文 私のきょうだい

分類 対象	親 和 定	結果	拒 否 定	結果	行動 性質(+)	結果	行動 性質(-)	結果	一人っ 子 いない	結果	その他	結果	計
一般群	91 (27.7)		38 (11.6)		14 (4.3)		13 (4.0)		25 (7.6)		147 (44.8)		328 (100)
鑑別所群	183 (30.7)		31 (5.2)		31 (5.2)		11 (1.8)		37 (6.2)		303 (50.8)		596 (100)
少年院群	259 (32.4)	+	73 (9.1)		58 (7.3)	+	12 (1.5)	-	66 (8.2)		332 (41.5)		800 (100)

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

刺激文私のきょうだいでは、親和反応は少年院群(32.4%)、鑑別所群(30.7%)および一般群(27.7%)で、少年院群が鑑別所群や一般群より、きょうだいを好意的にみている反応が多い。とくに少年院群では、きょうだいのプラスの行動、性質を記述するものも多いが、これはきょうだいを自分と比較して「真面目」「賢い」「頭がよい」といった反応が多いためである。鑑別所群においては

他の群と比較して、きょうだいに対して拒否の感情を示すものが少ないが、これはきょうだいばかりでなく、両親その他全般について言えることであるが審判を意識して、防衛的な構えから家族関係のマイナス面を記述しないことも考えられる。

表6 刺激文 私の家は

分類 対象	心理的 肯定	結果	心理的 否定	結果	物理的 肯定	結果	物理的 否定	結果	その他	結果	計
一般群	81 (24.7)		12 (3.7)	-	33 (10.0)	+	48 (14.6)	+	154 (47.0)		328 (100)
鑑別所群	151 (25.4)		53 (8.9)		33 (5.6)		46 (7.7)		311 (52.4)		594 (100)
少年院群	169 (21.1)		151 (18.9)	+	29 (3.6)	-	68 (8.5)	-	383 (47.9)		800 (100)

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

私の家は明るい、楽しい、落ち着くといった心理的肯定反応は、各群間に有意差はないが、少年院群では(21%)、他の2群は(25%)前後で少年院群は他の2群より少ない。さらに家が暗い、おもしろくない、落ち着かない、といった心理的否定反応が少年院群では、他の2群より有意に多く反応され、少年院群に家庭に対する不快感、不満感を抱いているものが多いと言える。

少年院群では物理的肯定反応と物理的否定反応ともに、一般群よりも少なく反応する傾向があり、一般群は両反応とも少年院群に比較して多く反応する傾向がある。ただし、物理的否定反応の内容を吟味してみると、経済的な貧困を示す内容の反応は非行群に多く、鑑別所群(5.1%)、少年院群(5.1%)で、一般群は(0.7%)と極めて少ない。このことから非行群により経済的な貧困家庭が多い

と推測できる。

一般群の物理的否定は、劣悪な建物を内容とする反応が多い。例えば、私の家は小さい、狭い、古いといった反応で、要求水準との関係もあるが、こうした物理的否定反応は有意に一般群が多く反応する傾向がある。

また、一般群は心理的否定が物理的否定より少ないが、非行群では物理的否定より心理的否定が多く、とくに少年院群ではその差が著しい。そのことは物理的な不満より家庭に

おける人間関係の不満が非行化の要因として大きく影響していると思われる。

以上のことから、少年院群は他の群に比較して自分の家の人間関係における不満感が強く、また経済的にも恵まれないものが多いと推測できる。

鑑別所群の家庭への帰属意識は少年院群と一般群との中間に位置する。

表7 刺激文 家にいると

分類対象	肯定	結果	否定	結果	無意欲	結果	非活動	結果	交友	結果	その他	結果	計
一般群	134 (40.9)	+	19 (5.8)	-	19 (5.8)		51 (15.5)	+	28 (8.5)		77 (23.5)	+	328 (100)
鑑別所群	205 (34.4)		88 (14.8)		70 (11.7)		44 (7.4)		66 (11.1)		123 (20.6)		596 (100)
少年院群	227 (28.4)	-	197 (24.6)	+	100 (12.5)	+	58 (7.3)	-	81 (10.1)		137 (17.1)	-	800 (100)

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

家にいると、楽しい、明るい、落ち着くといった情緒的安定を内容とする肯定反応は一般群が少年院群に比較して有意に多く反応する傾向があり、同様の傾向の裏返しとして家庭に不快感を示す否定反応は少年院群が一般群と比較して多く反応する傾向がある。

各群の肯定反応と否定反応の出現率をみると、一般群は肯定反応（40.9％）否定反応（5.8％）、鑑別所群は肯定反応（34.4％）、否定反応（14.8％）、少年院群は肯定反応（28.4％）、否定反応（24.6％）となっており、各群とも肯定反応が多いが、少年院群では肯定と否定がやや拮抗している。

非行進度の深い少年院群に、家庭における不満感や不快感を抱くものが多く、家庭に対する帰属意識の乏しいものが多いといえる。

家にいると「ひま」「退屈」といった行動のともなわない無意欲反応は非行群が一般群より多く反応する傾向がある。

これは、非行群が家庭において帰属意識の希薄さからの所在なきを示すものが多いことを示しているように思える。

「ゴロゴロしている」「寝る」といった非活動的反応は有意に一般群に多い。これは一般群の生徒のなかに、かなりの寮生も含まれているため、寮から家に帰ったとき、家は休息の場であることによる。生徒にとっては「ゴロゴロしている」「寝る」といった反応はリラクゼーションの役割を果たしているといえる。

交友反応は有意差はないが非行群が一般群より多く反応する傾向があるが有意な差ではない。

以上のことから、少年院群に明らかに家庭に対する不満感や帰属意識の希薄なものが多いことが推測できる。

表8 刺激文 家の中で私は

分類 対象	肯定	結果	否定	結果	自我主張	結果	非活動	結果	その他	結果	計
一般群	79 (24.1)	+	35 (10.7)	-	28 (8.5)		29 (8.8)		157 (47.9)	+	328 (100)
鑑別所群	158 (26.5)		102 (17.1)		39 (6.5)		72 (12.1)	+	225 (37.8)		596 (100)
少年院群	130 (16.3)	-	245 (30.6)	+	81 (10.1)	+	84 (10.5)		260 (32.5)	-	800 (100)

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

この刺激文は前述の“家にいると”と類似した刺激文であるが、第一人称の「私」が入っていることによって、反応文はかなり異なってきたので、その分類項目も若干異なっている。

家のなかでの自己概念を投影できると考えられるが、まづ自己肯定的反応は少年院(16.3%)が一般群に比較して有意に少ない。その裏返しとして、自己否定的な反応は一般群(10.7%)に対して少年院群(30.6%)で有意に多い。しかも、少年院群では肯定反応より否定反応が倍近く多く、少年院群に否定的自己概念をもつものが多い。とくに、家庭では嫌われ者、問題児だった、暗い生活をしている、自分の部屋に閉じ込めるといった被疎外感、家族との不適応、疎遠を示す内容が多く反応される傾向がある。

自我反応は、自分を主張する反応で自己顕示、自己中心性を内容とする反応で、例えば「我まま」「大将である」「好き勝手にしている」といった反応は、少年院群が有意に多く反応する傾向があり、非行性の深さと自己中心性との関連の大きいことを示している。

非活動反応「ゴロゴロしている」「寝る」は、前述の「家にいると」の反応傾向と異なり、鑑別所群や少年院群に、多く反応される傾向がある。これは「家の中で私は」と一人称で限定されてしまったために、より明確に家のなかでの生活態度が投影されたものと思われる。それは、一般群が音楽をきく、テレビを観る等々のその他の活動反応が多いのに対して、非行群にこの非活動的の反応が多いのは、怠惰な生活態度の投影と思われる。

性差では自我反応(自己中心的自我反応)は一般群では女子が男子より有意に多く反応する傾向がある。

非行群でも有意な差はないが、女子の方が多く反応する傾向があって、全般的に男子の方が女子より自己を抑制する傾向がある。

以上のことから、非行群に否定的な自己概念を抱くものと、自己中心的な性格を持つものが多い。特に少年院群にその傾向が顕著である。

表9 刺激文 家がいやになるのは

分類 対象	ない		結果		親の干渉		結果		喧嘩		結果		不快		結果		自己原因		結果		外的条件		結果		その他		結果		計
	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	結果	計	
一般群	91 (27.8)	+	69 (21.0)		60 (18.3)		41 (12.5)		7 (2.1)	-	15 (4.6)	+	45 (13.7)															328 (100)	
鑑別所群	223 (37.4)	+	94 (15.8)	-	85 (14.3)		64 (10.7)		53 (8.9)	+	12 (2.0)		65 (10.9)															596 (100)	
少年院群	128 (16.0)	-	238 (29.7)	+	83 (10.4)	-	146 (18.3)	+	73 (9.1)	+	11 (1.4)	-	121 (15.1)															800 (100)	

＋：その群が、その項目に有意に多く反応する傾向がある

－：その群が、その項目に有意に少なく反応する傾向がある

刺激文を否定して家がいやになることが「ない」と反応したものは、鑑別所群（37.4%）が最も多く、次いで一般群（27.8%）、少年院群（16.0%）となり、鑑別所、一般群ではこの「ない」反応が他の反応より多いが、これに反して、少年院群では「ない」反応が親の干渉をきらう反応（29.7%）や不快反応（18.3%）より少なくなっている。

少年院群に、家庭に明らかに不満や不快感を抱えているものが有意に多いと考えられる。鑑別所群にこの「ない」反応が多くみられるのは審判結果を意識しての防衛的な構えからと思われる。

親が「うるさいから」という反応は、少年院群に有意に多いが、これは少年院群が問題行動を起こし、親に注意される機会が多いため、親の養育態度における、いわゆる過干渉とは異なるものであると思われる。

家が「おもしろくないから」といった漠然とした不快反応も少年院群が他の群に比較して多く反応されていて、家庭に対する不満感や不快感が最も強いことが推測できる。

家がいやになるのは自分が原因であるとする反省的な反応は一般群は（2.1%）と極めて少なく、非行2群は（9.0%）前後の出現をみている。これは収容による失敗感からの広い意味で拘禁による反応といえる。

外的条件による反応は各群とも少ないが、非行群に比較して一般群に多く反応される傾

向があるが、一般群は家が狭いなどの物的環境を嫌い、非行群は物的、外的条件よりも、人間関係による不満が多いと思われる。

喧嘩反応は少年院群（10.4%）が他の群と比較して有意に少なく、一般群は（18.3%）と最も多いが、一般群は親との喧嘩したときが、強く印象づけられているのではないかとと思われる。

結語

非行の進捗別からみた施設収容少年の家族領域に関するSCTの反応傾向と、その反応傾向からみられた家族関係に対する認知構造のまとめは以下のとおりである。

(1) 「父親」について

まず、父親に対する反応では、親和、肯定反応は各群とも30%前後みられ、群間の差はないが、親和反応を細分類してみると、父親を信頼、尊敬、偉大な人と反応する者は一般群が多く、それに比較して少年院群、少年鑑別所群が少なく、このことから規範モデルとなる父親の存在が非行群に少ないと考えられる。

非行進度の深い少年院群に拒否反応と行動性質（－）反応が多く、それを合わせると25.8%となり、少年院生の4人に1人は父親に対して否定的な認知をしている。

両価（アンビヴァレント）反応は、鑑別所群が多く、次いで少年院群となっているが、

非行群が父親との安定した関係が乏しいことを示している。

父親との生別、死別にかかわらず、離別を内容とする反応は少年院群、鑑別所群とも一般群より多く、父親の欠損状態が非行群に多いことを裏付けている。

(2) 「母親」について

親和反応は各群に有意な差はないが、非行群が一般群より多く反応する傾向があるが、母親の行動・性質(+)反応を合わせると、各群とも同じような傾向である。

なお、親和反応の内容を吟味してみると、非行群では、母は「優しい」という反応が多く、一般群では母親を「信頼する。尊敬する。偉大な人」といった規範モデルとなる反応が多い。

非行群の母親に対する認知構造がより情緒的であるのに対して、一般群の方は理知的といえよう。

母に対する否定的、拒否的反応は非行群と一般群が鑑別所群より多く反応する傾向があるが、その内容を吟味すると、非行群は母親に対する嫌悪、不信の反応が多く、一般群は親の干渉をきらい「うるさい」といった反応が多いことが特徴的である。

離別反応は父親と同じく、母親についても非行群が多く、母の欠損状態が多いことが裏付けられる。

(3) 「きょうだい」について

有意差はないが、親和反応と行動・性質(+)反応を合わせてみると、少年院群がきょうだいに対して好意的反応が最も多く、次いで鑑別所群、一般群となる。

これは全く予想に反したことであった。なぜならば我々の臨床経験によると、非行少年には両親によるきょうだい間の差別などから、きょうだいに嫌悪感や敵意をもったものが多いと思われるからである。

なお、彼らはきょうだいを自分と比較して「真面目」「賢い」「頭がよい」と認知して

いるものが多い。

(4) 「私の家」について

心理的肯定反応と物理的肯定反応を合わせると、一般群が最も多く、次いで鑑別所群、少年院群となる。非行進度が深くなるほど、経済的に恵まれていないものが多く、自分の家に対する評価が低くなっている。

また、非行群は物的、経済的な不満より、人間関係による不満が多いと思われる。

(5) 「家にいると」について

各群とも情緒的安定を内容とする肯定的反応が他の反応より多いが、少年院群は一般群に比較して家族に対する親和反応が少なく、その裏返しとして、不快感を示す否定反応が多い。これは非行進度の深い非行群ほど家にいることについて不快感、不満足感を抱くものが多いことを示しているといえる。

(6) 「家の中で私は」について

家の中での肯定的な自己概念を示す内容の反応は鑑別所群が最も多く、次いで一般群であり、この両群は否定反応より肯定反応が多い。しかし少年院群では肯定反応が一般群や鑑別所群より有意に少なく、かつ否定反応よりも少なく、否定的な自己概念を抱くものが多い。また自我反応も多く、自己中心的傾向が強い。性差としては自己中心的反応はいづれの群も男子より女子の方が多い。

(7) 「家がいやになるのは」について

家がいやになるのは「ない」と刺激文を否定した反応は鑑別所群が最も多く、予想外であった。これは審判を意識しての防衛反応ではないかと思われる。

刺激文否定の「ない」反応は、少年院群が他の群に比較して少なく、かつ「親がうるさい」といった干渉に対する不満を示す反応や、漠然とした、おもしろくないといった不快、不満を示す反応より少ない。

また、家がいやになるのは「自分のせい」とする反省的な反応は非行2群に多い。

全般的にみて、以上少年院群が人間関係な

らびに物的家庭環境に最もめぐまれず不満感が強く、家庭に対する帰属感も希薄であり、不適応感が強いと言えるようである。

以上のような結果が見出されたが、文章完成法テストの反応文は、回答が限定されている質問紙法と異なり、極めて多様であり、反応されていない事象があるからといって、その事象が否定されるものでない。従って、統計処理になじまない面もあるので、その解釈にあたっては注意が必要である。

最後に本研究にあたって御協力下さいました東京、浦和、前橋、千葉、大阪、名古屋、

広島、福岡、仙台、札幌、高松の各少年鑑別所、および多摩、喜連川、赤城、茨城農芸、浪速、瀬戸、愛知、広島、福岡、人吉、四国、愛光、榛名、交野、貴船原、筑紫、青葉、紫明、丸亀の各少年院ならびに千葉県下私立某中学校、高等学校と、レポート作成に当たって、統計処理に御援助下さいました津富 宏氏ならびに全般にわたって御協力いただきました水野 周氏に厚く御礼申し上げます。